

左翼ポピュリズムの陥穽

布施 哲

朝日新聞社の『論座』、2007年1月号に掲載された赤木智弘の「丸山眞男をひっぱたきたい——31歳フリーター。希望は戦争。」という短いエッセーは、「衝撃的な戦争待望論」¹として様々な反響を呼び、年末の「回顧」では、同社に「停滞して久しい論壇で久々に注目された」²などという手前味噌のような述懐をさせるにいたった。

『論座』は、同年4月号でも「グッとくる左翼」なる題名の特集を組み、佐高信、鎌田慧、斎藤貴男らによる同エッセーへの応答をわざわざ集中的に掲載しつつ、このあざとい企画を引っ張った。「希望は戦争」という物騒な副題が祟ったのか、それら論者の反応はおおむね否定的なものであったが、それらに対してはさらに6月号で赤木の再反論を掲載するなど、この一連の論争に対して同誌は相当に入れ込んでいたようである。

メディアの企画としては一定の成功を取めたといえるのかもしれないこの論争があらためて示したものはといえば、しかし、左派もしくは中道左派系大手メディアの迷走ぶり以外の何だったのだろう。そしてその迷走ぶりには、“批判的知性”を自認する言説が大衆からの支持を失ってゆく際の兆候が見てとれないだろうか。

I.

まずは件のエッセーの内容を概観してみよう。このエッセーは、ほとんど反論の余地が残されていないように見える二つの層から成っている。第一の層は、それに対して反論をしても意味がない、もしくは反論をするだけの“論”がそもそも成立しているようには思えない、という意味において「反論の余地がない」のであり、他方、第二の層は、その現状認識における自明さにおいて「反論の余地がない」。

30歳を過ぎた事実上の無名フリーターが書いたこのエッセーは、「平和とはいったいなんなのだろう」という唐突な問いかけから始まるが、前半で綴られる現実は、かたちのうえでは、たとえば大学に所属しているという以外この著者とほとんど変るところがない——年齢においても経済状況においても——多くの大学院生などにもあてはまる切実なものだ。

平和とはいったい、なんなのだろう？

最近、そんなことを考えることが多くなった。

夜勤明けの日曜日の朝、家に帰って寝る前に近所のショッピングセンターに出かけると、私と同年代とおぼしきお父さんが、妻と子どもを連れて、仲良さそうにショッピングを楽しんでいる。男も30歳を過ぎると、怒濤の結婚ラッシュが始まるようで、かつての友人たちも次々に結婚を決めている。

一方、私はといえば、結婚どころか親元に寄生して、自分一人の身ですら養えない状況を、かれこれ十数年も余儀なくされている。31歳の私にとって、自分がフリーターであるという現状は、耐えがたい屈辱である。ニュースを見ると「フリーターがGDPを押し下げている」などと直接的な批判を向けられることがある。「子どもの安全・安心のために街頭にカメラを設置して不審者を監視する」とアナウンサーが読み上げるのを聞いて、「ああ、不審者ってのは、平日の昼間に外をうろついている、俺みたいなオッサンのことか」と打ちのめされることもある。

しかし、世間は平和だ。(赤木 53)

自身がおかれている状況とそこから抜け出すことができない心理的、外部的理由を把握し、それをまがりなりにも文章化し得るだけの知性を麻痺させることができない著者の自意識は、惨めな自分に嘲笑を浴びせ続ける（と彼の目に映る）心ない「世間」なるもののイメージを肥大化させるとともに、翻って、そうした「世間」に対する怨恨の念を、やり場のない焦りや絶望感とともに増幅させてゆく。「多くの人が今日と明日で何ひとつ変らない生活」を平和と呼ぶのであれば、「私から見た“平和な社会”というのはロクなものじゃない」³—かくして吐き捨てられた言葉が、この若いフリーターの「戦争待望論」のプロローグとなる。

戦争は悲惨だ。

しかし、その悲惨さは「持つ者が何かを失う」から悲惨なのであって、「何も持っていない」私からすれば、戦争は悲惨でも何でもなく、むしろチャンスとなる。

もちろん、戦時においては前線や銃後を問わず、死と隣り合わせではあるものの、それは国民のほぼすべてが同様である。国民全体に降り注ぐ生と死のギャップである戦争状態と、一部の弱者だけが屈辱を味わう平和。そのどちらが弱者にとって望ましいかなど、考えるまでもない。

持つ者は戦争によってそれを失うことにおびえを抱くが、持たざる者は戦争によって何かを得ることを望む。持つ者と持たざる者がハッキリと分かれ、そこに流動性が存在しない格差社会においては、もはや戦争はタブーではない。それどころか、反戦平和というスローガンこそが、我々を一生貧困の中に押しとどめる

「持つ者」の傲慢であると受け止められるのである。(赤木 59)

その「傲慢」の象徴として挙げられるのが、戦中は軍隊で上官にいびられたこともある、当時の“インテリ思想犯”、丸山眞男である。昨今もっぱら否定的に引き合いに出されることが目立つ“戦後民主主義”という名の言説空間をリードしてきた（と目される）丸山は、どうしたわけか、弱者を固定化し、強者、勝者のみが人生を謳歌し得る現下の社会/経済システムのなかでのうのうとしている既得権益集団の象徴として扱われる。

社会に出た時期が人間の序列を決める擬似デモクラティックな社会の中で、一方的にイジメ抜かれる私たちにとっての戦争とは、現状をひっくり返して、“丸山眞男”の横っ面をひっぱたける立場にたてるかもしれないという、まさに希望の光なのだ。(赤木 59)

戦争は「国民全体が苦しみつづける平等」⁴をもたらすことをこの著者は十分に理解しているが、しかし、まさにその負の平等こそが、固定化された社会の不平等を流動化させ、弱者が富と名誉を回復するための絶好の“チャンス”となるのだ、と彼はいう。

II.

この「戦争待望論」は、著者自身によれば、額面どおりに受け取られるべきであるということになっている。すなわち、「私の戦争への意思は、単なる脅しやレトリックではない。」⁵彼は自身がいたって真面目であると公言する。

「車がないとまともに生活できないような土地柄」⁶が、彼の自意識をさらに屈折させ、肥大化させたのかどうかは定かではないが、それがガラス細工のように脆弱でくたびれ果てており、それゆえいっそう感度が鈍っていることだけは確かなようだ。「世間」一般なる粗雑な概念では決して括ることができない無数の中間領域、思いがけぬ人物や事物との遭遇が転がっているはずの外界に対する感受性を曇らせたまま、「世間」から極度に孤立した自己のイメージは一足飛びに「全〇〇（世界、地域、国等々）」という極端なスケールのイメージへと反転してゆく。

彼の自閉的な想念から発せられる「戦争」とその悲惨さのイメージはといえば、それはもっぱら、負の平等を共有し、自分自身とようやく同一水準の惨めさにまで引き下げられた“同胞”、自分自身の鏡にほかならない“(惨めな) 全国民”が味わうであろう悲惨に限定される。そこには、同様に戦争の犠牲となる敵方の悲惨などいっさい含まれていない。彼ら敵方はこの青年のイメージのなかに、人間として入ってはこない

のだ。くたびれ果てて幼児退行気味になってしまった自意識には、他者感覚などもとより存在しない。

赤木が書き綴った一連の文章には、当然ながら矛盾点や論理的な不整合、あるいは度を越した見当違いも多く、彼に対する“反論”にもそれらを突いたものが圧倒的に多い。この青年がバブル世代と呼んで仇とみなす正規雇用社員も決して人間らしい生活をしているわけではないこと（奥原 86-87）、「国民全体に降り注ぐ生と死のギャンブルである戦争状態」⁷を躊躇なく選択すると断言して憚らぬ一方で、「安倍政権は“再チャレンジ”などと言うが、我々が欲しいのは安定した職であって、チャレンジなどというギャンブルの機会ではない」⁸としてみる素朴な論理的矛盾がそこかしこにあること（森 92-93）、あるいは戦争がもたらすのは負の平等ですらないこと（福島 90-91）など、いちいちもっともな指摘が次々となされた。

しかしながら、それらの“反論”がこの著者の心変わりを促すことはない。たとえば、一国の独裁者でもない一人のフリーターが個人的に介入し得るはずもない国家間の戦争ではなく、せめてある種の階級闘争——いろいろなかたちのものがあり得るはずだ——を目指すことはできないのか（鎌田 94-95）とか、あるいは、そんなに戦争が「希望」であるのなら、厚遇でもって迎え入れてくれるどこかの国の外人部隊にでも入隊すればよい、などといった“助言”にしても、彼にとっては耳障りな揚げ足取りにしかならないだろう。自尊心を深く傷つけられたと感じるこの不幸な自意識が癒されるのは、実のところ、不平等を正す「世直し」が成就することによってでも、あるいは万一事実として戦争状態が訪れたことによってさえもなく、ただ、彼自身が彼自身に対する否定的なイメージを払拭することによってのみなのである。それが叶わぬかぎり、彼の口から呪詛の言葉を消し去ることはできないが、さりとて、そのような“毒消し”は、むしろ、本人以外の誰の役目でもない。

頼まれてもない“癒し”を一人の孤独な青年に与える必要が誰もないのは、誰も彼の夢見につきあう必要がないのと同じである。正確には、『論座』の読者は、彼の個人的な“戦争願望”などにつきあう必要がなかった。そうした個人的な“願望”それ自体は、議論の水準にあるものでは到底ないからだ。それを心に秘めている限りにおいて、彼は悲惨なかたちで“平等”になった「全国民」の姿なり人類の破滅なりを好き勝手に夢見ていればよかった。

しかし、それは大手メディアの、一定の発行部数を得ている雑誌において文章化され、“問題化”されてしまったのだ。しかも、一度ならず二度三度と。はたして、一人の青年のくたびれ果てた自意識から発せられる幼児のような“戦争願望”は、それ自体として、かかる大騒ぎをするほどのものだったのだろうか。

III.

たとえば、「こんな世の中なくなってしまう方がいい」と感じ、「人類など減んでしまえばいい」などと不意に思ってしまうことは、誰にとっても、また、いくつになってもことさら特別な心理ではないだろう。社会とそこで暮らす人間の暗く澁んだ部分に失望や絶望、あるいは怒りを決して感じることもない無邪気な感性しか持たぬ“成人”がいるとしたら、むしろ、そちらのほうが問題といえれば問題だ。ましてやこの青年のおかれている状況を考えれば、なおのことだろう。

フリーターや派遣社員をとりまく現実的な条件、そしてそうした条件を整えてしまった経緯についての叙述に関しては、上述の論者たちも口をそろえるように、赤木のいうとおりで何の誤りもない。そこには「反論の余地」など、微塵もないのだ。

バブルがはじけた直後の日本社会は、企業も労働者もその影響からどのように逃れるかばかりを考えていた。会社は安直に人件費の削減を画策し、労働組合はベア要求をやめてリストラの阻止を最優先とした。そうした両者の思惑は、新規労働者の採用を極力少なくするという結論で一致した。企業は新卒採用を減らし、新しい事業についても極力人員を正社員として採用しないように、派遣社員やパート、アルバイトでまかされた。

結局、社会はリストラにおびえる中高年に同情を寄せる一方で、就職がかなわず、低賃金労働に押し込められたフリーターのことなど見向きもしなかった。最初から就職していないのだから、その状態のままであることは問題と考えられなかったのだ。

それから十数年たった今でも、事態はなんら変わっていない。(赤木 56)

法的には、1999年の労働者派遣事業法の改正（改悪）がこれを制度面で後押しすることになった。しばしば指摘されるように、若者から熱い支持を受けた小泉政権の“構造改革”は、当の彼ら/彼女ら若者を苦しめるものであった。

さらにいえば、フリーターや派遣社員に不遇を強い続ける日本の雇用制度は、もう何十年も続いているにもかかわらず、誰も本気でそれを正そうとしない悪しき慣習のうえに成り立っている。事態が「なんら変わっていない」のは、実は「十数年」ではなく数十年間のことなのである。その慣習とは、「大学新規学卒一括採用」という悪習のことだ。

いまから四半世紀も前に、ドラッカー研究者の三戸公は、現在でも「なんら変わっていない」日本に特有のそうした悪習について述べている。

新規学卒一括採用、それは一つの会社が就職希望者を受け入れる一つの方式であり、一つの制度である。義務教育を終え、あるいはさらには高等教育を受け、そして卒業したら、すぐに会社に就職する。三月三十一日に卒業し、四月一日に入社する。そのためにその前年の秋に入社試験を実施し、採用を決定する。なんと自然なことであろう。これ以上に自然で、当たり前のことはないように思われる。

なんの変哲もない、ごく自然で当たり前で、これ以外のことは考えられないように思われる。ごく自然で当たり前のことであり、それ以外のことは考えられないようなものだから、それ以外のことは不自然であり、当たり前ではないことと考えられる。

だから、履歴書において、昭和何年三月三十一日〇〇大学卒業、同年四月一日△△株式会社入社と記入されていない者は、ふつうの社会人とは見なされないことになる。履歴のうえにおいて、取り返しのつかない深刻な事項となり、問いただされることになる。新規学卒一括採用が、聖化せられるゆえんである。(三戸56)

厚生労働省の調査によれば、平成15年の一年間で中途採用を行なった企業の割合は業種にかかわらずほぼ7割前後の高い数字を示しており、これは増加傾向にあるとされる。⁹しかし、当然ながら、そうした数値は中途採用者の絶対数ではない。一人でも採用すれば、それは採用実績としてカウントされるのだ。実際、わざわざ統計などにとらずとも、企業の採用が「新規学卒一括採用」方式を確固とした基礎としており、「中途」は不定期かつ例外的な雇用でしかないことはあまりに自明のことである。

たとえば英語では“mid-career worker”という語があり、これは日本語で“中途採用社員”などと訳される場合があるが、厳密には“mid-career”というのは中堅社員、まだ途上にあって十分なキャリアを積んでいない労働者のことを指している。つまり、それは労働者が提供できる労働の質やスキルの高低を示すのであって、雇用の仕方そのものを指すわけではない。

そもそも、採用に“中途”という二文字が入ること自体、この国の企業の採用が「三月三十一日卒業、同年四月一日入社」という暦を「ごく自然で当たり前のこと」とし、「それ以外のことは不自然」と見なしている証左であろう。あくまで「同年四月一日入社」でなければならないのだ。

女性や、あるいは赤木のようないわゆる“低学歴”の労働者、さらには外国人労働者の不遇などを勘案すると、日本の企業による中途採用の実態は実際の数値よりもさらに閉鎖的で停滞したものとなっているだろう。

IV.

「新規学卒一括採用」というシステムは、労働力の流動化を著しく損ない、“中途採用（者）”という概念を日本の企業文化のなかにだらだらと温存させるが、その弊害はいくつもあり、それらはいずれも深刻なものである。

たとえば大学生の学力や知性の低下。「低下」といっても、それは今に始まったことではない。何十年ものあいだ、学生の“キャリア形成”にとって重要なのは、第一に自分が所属する大学の名前、そして第二に「三月三十一日卒業、同年四月一日入社」という暦どおりに4年間を過ごしたかどうかということだけである。第三項以下は存在すらしない。学生はこの“暦”を遵守すべく、在学中の早くも3年生の夏前後からすでに就職活動を行なう。教養課程が終了し、これからようやく専門課程に入ろうという時期に、学生はすでに件の“暦”にのっとり次の“ステップ”に進む準備をするわけだが、大学側はこれに対し、企業側に抗議のひとつもしない。それが「ごく自然で当たり前のこと」だからだ。

学生側も、「ごく自然で当たり前のこと」の何たるかはよく心得ており、“暦”を逸脱しない限りにおいて、手間のかかる余計なことは一切しない。その「余計なこと」とは、むろん学問である。

わたしはあるとき、どんな学生を求めるかと、会社の人事担当者の数人に聞いたことがある。「丈夫で素直な子をよこしてください」の答えが返ってきた。それを実証するように、体育会系のクラブに入っている学生の就職はきわめて有利である。選手であろうとあるまいと、会社に入ってから選手としてやらない者でも、有利なのである。彼らは丈夫で素直な若者であると、評価されているからである。

なぜに丈夫で素直なことが重視され、何を学んだかはさして問題とはせられないのだろうか。会社は新入社員に、特定の仕事をやる能力を求めているからである。特定の職務遂行能力は、入社後に教え込むことになっているからである。どの学部を出たっていいのである。（三戸 60）

大学生の学力低下は、「新規学卒一括採用」システムが続く限り、どうにも避けられそうにないようだ。企業も、そして学生自身でさえも、学力や教養などは求めている。むしろ、社会に対して異を唱える下地となるような余分な教養は、「丈夫で素直な子」には無用の長物なのである。だとすれば、なにゆえ新人職員が大学卒である必要があるのだろうか。大学の受験勉強で好成績をあげた子供は、それ以後、終生、ほぼ何をやらせても、どのような仕事をさせても、無条件に優れている（少なくともマシである）という、ほとんど根拠のない迷信のような不合理が、ここではいまさらながらに確認

されざるを得ないだろう。

ちなみに、企業で新卒者に対して施される“教育”なるものも、“グローバルな資本主義社会”のどこでも通用するような中立的な“スキル”の類ではない場合が多く、それらはしばしば同じ業界内でさえ、“職務遂行上”、直截的には意味をなさない。

新入社員に対して企業はこれまで学校で学んできたことを早く忘れよという。そして「会社本位」主義を徹底的に植えつけることによって、学生から「会社人」に改造しようとする。そのためには（中略）修養団とか成人教学研修所など右翼的な専門機関を利用するし、自衛隊への体験入隊をさせる会社も多い。右翼的な修養団といい自衛隊といい、日本の会社が軍隊組織に似ていること、そして会社絶対主義が国家主義とつながっていることのあらわれである。（奥村 85-86）

会社の新人研修のすべてが奥村宏のいうように「国家主義とつながっている」かどうかは措くとして、実際に企業への就職経験がない、たとえば大学教授などは、“一流大学”なるものを卒業した教え子たちが、卒業して数週間以内に滝に打たれながら“研修”していることも、相手によって変化するお辞儀の角度を丸暗記させられていることも知りたくない。知性や教養がある“素直でない子”には馬鹿げたものとしか映らないそれらのことが、社会人ならぬ「会社人」にとっては「ごく自然で当たり前のこと」であるにもかかわらず。

こうしたカルト的な“研修”を可能にするのは、心理的には、研修指導を実施したり計画したりする“先輩職員”にとって、新人職員が年齢的に相当若いことが「当たり前」であるためであり、そして制度的には、ひとたび入社させてさえしまえば、“暦”から逸脱して会社を辞めることなど（こちらから“リストラ”や“肩叩き”でもしない限り）原則的にないであろうことが、やはり「当たり前」であるためだ。労働組合の委員長になることが、人事課長、人事部長を経て役員にまで上り詰めるための近道であるような企業文化においては、雇用者と被雇用者とのあいだの緊張関係などあって無いようなものだが、そうした無緊張状態の根幹には、「新規学卒一括採用」とそれにとまなう労働力の非流動性が、その大きな要素としてある。

さらには、執拗に続く雇用時の年齢差別（大学の採用人事なども例外ではない）や過労死問題、サービス残業問題、あるいは先進工業国では最低レベルにある労働生産性の問題等々、これに関連して実際に変革を求められるべき問題はいくらかでもある。

V.

怨恨の吐露ばかりが取り沙汰されるが、この青年による告発の部分は何ひとつ間違っ

てなどいない。しかるに『論座』の一連の企画では、「希望は戦争」という部分が必要以上にクローズアップされているようにも見える。なにゆえ口に出せば当然のごとく叩かれる部分をことさらに強調させ、「丸山眞男をひっぱたきたい」——繰り返せば、そう思うのは彼の勝手だ——という題名に象徴される扇情的要素を前面にだしたのか。一人の青年に戦争を「希望」させてしまうような酷い状況それ自体を論じたかったというのであれば、本来的に“論争”などしても仕方のない個人のルサンチマンをめぐってただらと話題を引き延ばす代わりに、なにゆえ、ずっと以前から指摘されてきた、先述のような構造的な問題をこそ集中的に取り上げなかったのか。「停滞して久しい論壇」なるものがあるとするれば、その「停滞」は、そうした安易なセンセーショナルリズム——その安易さは、いまやメディアの無意識にさえなっている——にこそ、その遠因があるのではないのか。

実のところ、当の朝日新聞社自体も「新規学卒一括採用」に関しては守旧派たらざるを得ないこと、“一流大学卒”の「丈夫で素直な子」を採用し続けざるを得ないという事実から話題を逸らすために、意図的にセンセーショナルな色をつけたのではないのかという、過度に穿った見方を思わずしてしまいそうになるほどだ。

議論になり得ない部分と、主題としてより構造的・根本的なレベルで論じられるべき部分とを可能な限り腑分けしたあとで、ジャーナリズムがそれらのうち、どちらを選んで取り上げるべきであるのかは明らかなはずだ。前者はときとして扇情的で「グッとくる」かもしれないが、そのような直情的な反応はポピュリストが期待するものであって、ジャーナリズムが読者に向かって蒔くべき餌ではない。左派系の批判的言説が人々に魅力的なイマジネーションを喚起しづらくなっていることが事実であるとしても、インターネット掲示板における“釣り”のごとき手法に頼って「久々に注目された」ことを誇らしげに振り返るようであれば、われわれの目には“ジャーナリズム宣言”が早晩空疎なものに映ってしまうことだろう。¹⁰

注

- 1) 赤木の『若者を見殺しにする国——私を戦争に向かわせるものは何か』への、赤井敏夫の書評からの一節。朝日新聞、2007年12月9日の書評欄にて掲載。
- 2) 朝日新聞電子版、2007年12月30日付コラムより。
http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY200712230081.html
- 3) 赤木智弘「丸山眞男をひっぱたきたい——31歳フリーター。希望は戦争。」『論座』2007年1月号53
- 4) 同58
- 5) 赤木智弘「けっきょく、“自己責任”ですか——続“丸山眞男”をひっぱたきたい“応答”を読

んで」このエッセーに関しては、赤木自身が運営するウェブサイトに掲載されている電子版を参照した。<http://t-job.vis.ne.jp/base/maruyama2.html>

- 6) 赤木「丸山真男をひっぱたきたい」54
- 7) 同 59
- 8) 同 54
- 9) 『平成 16 年度雇用管理調査結果の概況』「中途採用者について」電子版
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/kanri/kanri04/index.html>
- 10) 11 月号の特集、「現代の連帯」は、青臭いが朝日らしい良質な企画であった（『論座』2007 年 11 月号）。左派の大御所たちを大挙引っ張り出してきてあたりまえの感想を述べさせることにはではなく、浅尾大輔のルポルタージュにこそ、赤木への正当なレスポンスがあったはずだ。

引用文献表

- 赤木智弘「丸山真男をひっぱたきたい——31 歳フリーター。希望は戦争。」『論座』2007 年 1 月号
赤木智弘「けっきょく、“自己責任”ですか——続“丸山真男”をひっぱたきたい“応答”を読んで」
<http://t-job.vis.ne.jp/base/maruyama2.html>
- 奥原紀晴「絶望しているわけではありません」『論座』2007 年 4 月号
森達也「ギャンブルに負けるのはあなただ」『論座』2007 年 4 月号
福島みずほ「フリーターこそが戦争へ行かされる」『論座』2007 年 4 月号
三戸公『会社ってなんだ 日本人が一生すごす「家」』光文社 1981 年
奥村宏『会社本位主義は崩れるか』岩波新書 1992 年